山手の丘で進む、洋館の保存活動

根岸湾を望む南の崖線の起点――山手の丘では、市民に開かれた形での洋館の保全活用が進んでいる。

中区の港の見える丘公園、外国人墓地から根岸森林公園に至る山手の丘には、今でも、イギリス館、山手111番館など洋館が並び、緑と一体となった歴史的な景観を形成している。これら洋館は横浜市の『歴史を活かしたまちづくり要綱』によって、保存され、市民および観光客に開放されている。

その一つ、山手234番館は、活用のあり方をめぐって市民を交えた幅広い議論が行われ、一般公開に至った洋館である。

建物の活用を考えるために集まったのは、地域住民や地域活動団体関係者など。また、市が公募した一般市民も数多く参加した。活発な検討の末に打ち出されたのは、見るための洋館ではなく「使える洋館」という方針である。実際に、山手234番館に限らず、横浜市が保有する「山手西洋館」では、毎月のようにコンサートや絵画展などさまざまな催しが企画され、山手の地域に根ざした文化活動の場として活用されるようになってきている。

特に近年ではクリスマスの催しなどを単館で実施するのではなく、地元の団体や地域住民の協力のもと山手地区に点在する各西洋館が連携して行うケースがでてきている。山手の洋館が演出する丘の手文化を「面的」に打ち出していこうという動きである。

かつて、臨海丘の手の西洋館が文化人や実業家のサロンとして活用されていたように、山手の丘全体が、市民交流のための文化サロンとなりつつある、といえよう。

●山手234番館

臨海丘の手・まとめ

異世代共同居住――丘の手文化が提唱する新たな住まい方

横浜の最初の郊外というべき臨海丘の手には市街地形成の歴史が古いだけに、高齢者も多い。高齢化が進む住民たちの住まい方のゆくえも大きなテーマだ。

その解決への一つの糸口が松が丘や白幡と地続きの西寺尾で実践されている。大規模敷地を生かした共同住宅に単身の高齢者と若いファミリー世代が一緒に住み、世代間交流を育もうという試みである。

「ラ・クラッセ西寺尾」は、地域内で獣医を営む地権者が市の「シニア・りぶいん」と「ヨコハマ・りぶいん」の制度を活用して、平成7年に建設した共同賃貸住宅である。

8階建の建物には住宅部分だけでなく、高齢者が安心して暮らせるよう、気軽に往診に応じてくれる診療所や給食サービスのNPOも同居している。

ラクラッセ祭りの風景

現在の居住世帯は、一人暮らしや夫婦二人暮らしの高齢者43世帯を含め100世帯あまり。居住者の年齢は、65歳以上の高齢者層と20～30代の子育てファミリーで構成され、40～50代の住民はほとんどいない。

中間世代がいないにもかかわらず、住民間の交流は盛んだ。居住する高齢者でシニアクラブを結成し、クリスマスにはサンタクロースやトナカイの扮装をしてマンションの子どもたちにプレゼントを配ったり、餅つき大会やラクラッセ祭りなどを企画し、世代を超えた住民間の交流を積極的に図っているからである。

「ラ・クラッセ西寺尾」では高齢者が一方的にケアされるのではなく、逆に自ら動くことよって若い世代との絆が強まり、それが自分自身の安心感として返ってくる。

この住まい方の工夫は一つのモデルとなって、いずれ臨海丘の手のみならず横浜郊外の丘の手全体に広がっていくのではないだろうか。